



「ボールパークから見えるもの」

場外の雑音も収まらない中、アメリカ・ロスアンゼルス市内にある「ドジャースタジアム」は、連日5万人を超えるファンでにぎわっているようです。スーパースター大谷選手の人気に加え、日本プロ野球界のエース投手であった山本由伸選手見たさと期待もあり、しばらくは「満員御礼」が続くと見込まれる状況です。こんなドジャースタジアムは、1962年の開場ですが、同じ年の1962年に東京都内にも新しい近代的な球場「東京スタジアム」がオープンしたことをご記憶でしょうか…。



この球場は、東京都荒川区南千住にあり、「東京球場」という通称でも呼ばれました。(1964年に大学生となった私も、数回通った思い出があります。)同球場は、千葉ロッテマーリンズの前身にあたる大毎(大映・毎日)オリオンズが本拠地として使用していましたが、諸事情もあり1972年限りで閉鎖。その後1977年にスタジアム自体も解体され跡形もない状況です。そもそも、当時の在京球団の読売ジャイアンツ、国鉄スワローズ、大毎オリオンズの3球団が後楽園球場を本拠地としており、日程の過密化が常態化にあったため、大毎のオーナーだった永田雅一(大映・映画会社の社長)は私財を投じ、自前の本拠地球場を建設したものでした。この時期の大映は映画産業の斜陽化などで経営難に陥りつつあったが、永田は約10億円で用地を取得、建設工事は1961年7月に着工。総工費約20億円をかけ1962年5月31日に竣工し、「東京スタジアム」と命名されたのでした。しかし、パ・リーグに属していた大毎球団は、巨人の黄金期(V9時代)と重なり、プロ野球人気はセ・リーグ偏重の傾向が強まっていた事情もあり、低迷の時期にありました。年間観客動員数も開場初年度こそ70万人を突破して盛況を見せたもののその後はジリ貧に陥り、スタジアムの建設費を減価償却できない経営状態が続き、翌1971年、大映は球団の経営権をロッテに譲渡し本社の経営再建に乗り出すものの倒産。その後1977年3月に東京都が跡地を取得し、4月からスタンドは解体された。跡地は大半が荒川区の管理する「荒川総合スポーツセンター」となって、現在の体育館や軟式野球場などに変容されているのです。ちなみに、当時の日本のプロ野球界を構成する球団は、①新聞社系、②鉄道会社系、③映画会社系、④その他の事業会社系に分けることができました。①には「読売ジャイアンツ」「毎日オリオンズ(現千葉ロッテマーリンズ)」「中日ドラゴンズ」「国鉄スワローズ(現東京ヤクルトスワローズ)」②には「大阪タイガース(現阪神タイガース)」「阪急ブレーブス(現オリックスバファローズ)」「近鉄バファローズ(現オリックスバファローズ)」「南海ホークス(現福岡ソフトバンクホークス)」「西鉄ライオンズ(現西武ライオンズ)」③には「大映スターズ(現千葉ロッテマーリンズ)」「東映フライヤーズ(現北海道日本ハムファイターズ)」④には「大洋ホエールズ(現横浜DeNAベイスターズ)」「広島カープ(現広島東洋カープ)」など、古き懐かしさとともに名シーンを思い出させる球団がありました。まさに当時の日本経済の縮図のようであり、企業・業種の栄枯盛衰を反映しているような顔ぶれでした。



さて、「嘆かわしい裏金問題」や「衝撃の大谷通訳の不祥事」は、“エイプリルフール(4月1日の午前中だけの夢物語)”であったと、願っているのは私だけでしょうか…

